

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：37105

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2019

課題番号：26370349

研究課題名(和文) アフリカ系アメリカ文学と視覚芸術における歴史的トラウマ表象の変遷

研究課題名(英文) Representation of Historical Trauma in African American Literature and Visual Art

研究代表者

宮本 敬子 (Miyamoto, Keiko)

西南学院大学・外国語学部・教授

研究者番号：60182044

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：アフリカ系アメリカ文学と芸術において、歴史的トラウマである奴隷制度、戦争、テロ、災害などがどのように表象されてきたのか、トニ・モリスン文学と視覚芸術との影響関係を中心に考察した。歴史的トラウマをどのように表象し後世に伝えていくかという現代的課題に対して、モリスンと影響関係にある芸術家たちは、アフリカン・アメリカンの伝統でもある創造的再読行為によってトラウマ表象を更新しつづけることにより、歴史の記憶を伝え続けようとしていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歴史的トラウマ、すなわち共同体の過去におけるトラウマ的出来事(戦争、災害、テロ、植民地支配、疫病など)をどのように表象し次世代に伝えていくのかというテーマは、原爆投下や東日本大震災など、歴史的トラウマを抱える日本にとって極めて重要な課題である。奴隷制度という負の遺産をもつアフリカ系アメリカ文学と視覚芸術の研究を通して、共同体のトラウマを伝えていくために、文学や芸術の果たす役割がいかに重要であるかを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：My research examines the representations of historical trauma in African American literature and visual art, that is, how African American writers and artists represent traumatic events from history and attempt to pass them on to the future generation. More specifically, my research focuses on how Toni Morrison not only attempts to reconstruct the traumatized history of African-American people but also to re-conceptualize the notions of race, history, and community through interactions with visual art in her historiographic works.

研究分野：アメリカ文学・文化

キーワード：トニ・モリスン トラウマ表象 視覚芸術 歴史記憶 カラ・ウォーカー ジェイコブ・ローレンス
ノーマン・ルイス 黒人表象

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 22 - 24 年度科学研究費助成により行った研究課題「アフリカ系アメリカ文学と視覚芸術における奴隷制度の表象の成果をさらに発展させるもの」として計画された。前研究は、アメリカ合衆国における公民権運動以降の時代、アフリカ系アメリカ文学および視覚芸術に共通して現れた現象、すなわち奴隷制度が作品のテーマや舞台として復活した現象に注目し、その社会的・文化的要因の考察や、アフリカ系アメリカ文学と視覚芸術との比較研究を行った。とりわけ、1993 年に黒人女性として初めてノーベル文学賞を受賞した Toni Morrison と、既存の芸術制度から数多くの栄誉を与えられ、今アメリカで最も注目されるアーティスト Kara Walker という現代アメリカを代表する黒人女性芸術家の影響関係を明らかにし、二人の想像力の近似性や、歴史のなかの「語りえぬもの」をめぐるコール・アンド・レスポンスを分析した。その成果は、トニ・モリスン国際学会をはじめとした国内外の学会において発表したうえで、英語論文としてまとめ、日本アメリカ学会の学会誌に発表することができた。その過程において、さらなる多くの発見があったが、モリスンと視覚芸術との影響関係について本格的な研究は国内外を含めてまだほとんどなされていないことから、このテーマがモリスン研究に新たな地平を切り開くものであることが明らかになった。

前回の研究で浮かび上がってきたことは、モリスンが奴隷制度表象のみならず、アフリカ系アメリカ人共同体の歴史的トラウマと深くかかわる出来事、すなわち大移住(グレート・マイグレーション)、人種暴動やリンチ、戦争、公民権運動などの表象においても、視覚芸術との深い影響関係のなかで創作を行っているということである。アフリカ系アメリカ人の大移住の表象に関しては、『マイグレーション・シリーズ』という大移住を描いた一連のパネルで有名な画家 Jacob Lawrence と、モリスンの小説『ジャズ』との影響関係を明らかにして学会発表を行ったが、その成果は研究論文として学術図書に掲載されることになっている。

文学と視覚芸術におけるトラウマ表象の変遷についての研究は、その端緒を開いたばかりである。前研究ではモリスンのみならず、アメリカの作家・芸術家による奴隷制度表象を歴史的に検証することによって、それらが時代や人種・ジェンダーによって変遷することを考察してきた。とりわけ今世紀においては、公民権運動を経験し 1970 年代までに台頭してきた作家・芸術家と、公民権運動以降に生まれた若い世代の作家・芸術家とのあいだで大きく変化しつつあることが明らかになっている。これはポストメモリー世代(Hirsch)、すなわち過去の出来事を記憶する体験者や証言者がいなくなった世代の芸術家が、共同体の歴史的トラウマをどのように表象するかという問題とも関わっている。この現象は奴隷制度表象にとどまらず、アフリカ系アメリカ人共同体における歴史的トラウマ表象全般に見出される現象であるという確証を得るに至った。

2. 研究の目的

本研究は、アフリカ系アメリカ文学と視覚芸術における歴史的トラウマ表象、すなわち共同体の過去におけるトラウマ的出来事が、どのように表象され、次世代に継承されていくのかを明らかにしようとするものである。具体的には、Toni Morrison 文学における歴史的トラウマ表象と視覚芸術との影響関係に焦点をあて、奴隷制度、大移住、人種暴動、戦争、そして公民権運動などの表象をめぐるコール・アンド・レスポンス、さらには世代間・ジェンダー間の文化交渉や文化継承の問題を分析する。

3. 研究の方法

本研究は、1) 海外の図書館・美術館・博物館における文献・資料収集、2) 国際学会への出席および研究報告、専門家との意見交換、3) 英語と日本語による論文投稿を通じた成果発表、が中心となる。5 年計画となるのは、5 年間の研究活動を英語による単著として出版するための素地として整えるためである。上記の研究活動と合わせて、翻訳活動や講演活動を通じて、一般社会にも研究成果を公表していくことが重要であると考えている。本研究の方法論的枠組みとしては、新歴史主義と精神分析学という対立的に捉えられがちであった二つの理論を、文学・視覚芸術研究において融合させるという方法をとる。歴史的トラウマの表象を分析するには精神分析学の理論が必須であるが、具体的な歴史資料や視覚表象は、抽象的で難解になりがちな精神分析学理論に具体性を与え、刺激的で興味深い研究へと発展させていくことが可能である。

4. 研究成果

(1) 本研究の主眼であるトニ・モリスンとアフリカ系アメリカ人芸術家における歴史的トラウマ表象の比較研究においては、3 点の研究論文を学術書および学術雑誌において発表することができた。初年度に、「グレート・マイグレーションをめぐるコール・アンド・レスポンス トニ・モリスン『ジャズ』とジェイコブ・ローレンス『マイグレーション・シリーズ』」として論文をまとめ、2015 年 3 月に刊行された書籍『アメリカン・ロードの物語学』において発表した。モリスンとローレンスの交流関係はよく知られていたものの本格的な比較研究は少なく、本論考ではとくに『ジャズ』における様々な場面やエピソードが、ローレンスの絵画にインスピレーションを受けたものであること、「大移住」というアフリカ系アメリカ人共同体の歴史的トラウマをどのように表象するかという問題において、モリスンは小説を通してローレンスの表象を創造的に再読しコール・アンド・レスポンスを行なっていることなどを明らかにした。本論文は、2014 年 5 月下旬にワシントン DC で開催された American Literary Association の年次大

会に出席した際に、議会図書館やフィリップ・コレクション美術館にて行った黒人美術・歴史関連の文献・資料収集と、同年11月上旬に行ったニューヨーク公立図書館ショーンバーグ分館での資料収集の成果に基づいている。2点目の研究成果は、2016年度に発表した「『奪われた人々(家族)』と抽象表現主義への応答 『青い目が欲しい』とノーマン・ルイス」という論文であり、『新たなるトニ・モリスン』という2017年3月下旬に出版されたモリスン研究書に納められた。モリスンとアフリカ系アメリカ人芸術家ノーマン・ルイスとの関係はほとんど研究されておらず、おそらく本論が最初の本格的比較研究になるかと思う。この論考は、2015年3月下旬に、ハーヴァード大学にて開催されたトニ・モリスンの講演 Configuration of Blackness に出席し資料収集を行った際、モリスンとアフリカ系アメリカ人芸術家 Norman Lewis との関係について知見を得ることができたこと、さらには偶然にも2016年にルイスの芸術の全貌に迫る全米初の回顧展が開催されたことによって可能になった。1月上旬フィラデルフィアで開催された Modern Language Association 年次大会に参加し、歴史的トラウマや黒人表象関連のセッションを中心に出席したのち、シカゴにてノーマン・ルイスの回顧展を実際に見ることができ、多くの新たな知見を得ることができたことが成果につながった。3点目は、2018年8月にこれまで研究を続けてきたトニ・モリスンが急逝したため、「トニ・モリスンと歴史的トラウマ表象」というタイトルで、これまでの研究成果をまとめるような形で追悼論文を執筆し学術文芸誌『ユリイカ』に発表した。一般に広く研究成果を発表する貴重な機会となった。

(2) 本研究において重要なもう一つのテーマである歴史的トラウマとしての黒人女性表象については、2件の学会発表、2点の研究論文、及び1点の翻訳書として成果を残すことができた。

学会発表においては、前述した2014年5月の議会図書館やフィリップ・コレクション美術館にて黒人美術・歴史関連の文献・資料収集を行った成果をもとに、6月上旬に日本アメリカ学会年次大会のシンポジウム「公民権法制定後半世紀、アフリカ系アメリカ人文学・文化は変わったか?」において「黒人女性表象は変わったか Kara Walker と Mickalene Thomas の場合」として発表し、黒人女性芸術家が従来の他者化された黒人表象、とりわけ女性表象をどのように書き換えているかを多数の画像とともに提示することができた。この発表原稿は、翌年一部を発展させて、「黒人女性表象のゆくえ bell hooks と Kara Walker の視覚芸術」という紀要論文にまとめた。2015年5月上旬には日本アメリカ文学会九州支部大会シンポジウム「アメリカ南部とホワトネス」において「Grace King 文学における人種・ジェンダー表象」という発表をした。この発表は、南北戦争という歴史的トラウマを経験した白人女性作家が、黒人性、白人性をどのように表象しているかを考察するもので、研究テーマをさらに深める契機となった。翻訳書としては、黒人女性表象についての先駆的研究者、社会文化批評家であるベル・フックスの著書 *All about Love* の翻訳に取り組み、『オール・アバウト・ラブ 愛についての13の試論』として、2015年3月上旬に出版した。この翻訳によって、フックス思想における愛の概念が、歴史的トラウマとしての黒人表象やアフリカ系アメリカ人の自己意識の変容の場と密接につながっていることを再確認することができた。2019年10月には、モリスンとも深い関係のある黒人女性作家アリス・ウォーカーの『カラーパープル』と、その翻案であるスピルバーグの映画との比較研究に関する論文を『アメリカ文学と映画』という研究書において発表した。これは当初の研究計画にはなかったが、黒人共同体における家庭内暴力という観点では、アフリカ系アメリカ文学と視覚芸術におけるトラウマ表象と深い関連があり、2017年に発表したトニ・モリスンの『青い目が欲しい』論とも共通するテーマであったため論文執筆に取り組んだ。スピルバーグの『カラーパープル』は日本ではあまり研究がなく、映画翻案研究にも貢献できたと思う。

(3) 本研究費によって可能になった海外での資料収集及び国際学会出席によって、世界的に著名なアフリカ系アメリカ文学・文化研究者と交流するということだけでなく、ハーヴァード大学にて開催されたトニ・モリスンの連続講演、様々な学会における Angela Davis、Sonia Sanchez、Jamaica Kinkaid、Samuel Delaney、Cornel West などの著名な作家、批評家による講演会に出席するという極めて貴重な機会を数多く得た。そのような機会に知り合うことができた研究者や芸術家を日本に招き、次のような学会や講演会を開催し、学生だけでなく広く一般社会にも貴重な機会を分かち合うことができた。2014年11月にロサンゼルスで開催された American Studies Association の年次大会に出席し、黒人表象のセッションに参加したが、その時紹介されたリーハイ大学准教授、James Braxton Peterson 氏を大学に招聘し、12月に "The Power of Underground in African American Culture" と題して英文学科主催講演会を開催した。Peterson 氏は、モリスン学会初代会長 Carolyn Denard 教授が膝の病気のため来日不可能になったため、代理として講演をされた方だが、その内容が現代アメリカ文学・文化におけるアンダーグラウンドの表象であり、歴史的トラウマ表象研究と密接に関わっていたため大いに参考になった。2015年6月下旬にはニューヨーク在住の新進気鋭の映画監督、トーマス・アレン・ハリス氏を講師に迎え、数多くの賞を受賞したドキュメンタリー映画 *Through a Lens Darkly: Black Photographers and the Emergence of a People* (2014) 上映会と講演会を開催した。家族写真を通してアフリカ系アメリカ人の自己認識および文化的レベルにおける黒人表象の変革を目指すハリス氏の芸術活動は、歴史的トラウマに芸術家がどのように取り組んでいるかを知る貴重な経験となった。さらには上記の海外出張によって入手した貴重な資料をもとに、本務校の大学における一般社会向けエクステンション講座「ジャズという奇跡」シリーズにおいて、

「ジャズと視覚芸術—ノーマン・ルイスとビバップの美学」(2017年)、「ジャズ、文学、視覚芸術」(2018年)を行った。

(4) 本研究期間中の2017年度9月より約半年間、フルブライト研究員としてブラウン大学に滞在し、元指導教授のJoan Copjecのセミナーおよびアフリカ系アメリカ表象文化(映画、視覚芸術専門)の新進気鋭の研究者Kara Keeling教授のセミナーに出席し、最新の研究動向および成果を学ぶことができた。そのような機会が可能になったのも、それまでの研究助成により海外の研究者との交流することができたことが大きかったと思う。とりわけ、2017年7月下旬にニューヨークで開催されたモリスン学会のテーマは、"Toni Morrison as Editor"であり、ランダムハウス社の編集者であったモリスンの編集を受けた作家たちのシンポジウムとラウンドテーブルを中心に、ディスカッションを行い、その後各グループの討議内容を報告するというワークショップ形式の参加型学会であり、代表的なモリスン研究者とのワークショップで情報交換することによって得るところが大きかった。2018年3月にはワシントンDCの議会図書館で資料収集をし、ナショナル・ポートレート・ギャラリーにてミッシェル・オバマやモリスン、シルビア・プラス関連の展示を視察し、公共圏における女性表象という観点からトラウマ表象や女性表象を考察する新たなテーマを得た。研究課題のテーマにさらに新たな視点を組み込むという意味では、上記の学会での知見や入手した収集を元に、2019年4月に日本アメリカ文学会中部支部大会シンポジウムにおいて、「ハーレム・ルネサンスと黒人表象の変遷」について発表し、現代の黒人視覚表象における問題がすでにハーレム・ルネサンス期に萌芽していたことを明らかにした。

(5) 本研究の最終目標はPeter Lang社から出版予定の*Toni Morrison and Visual Art*の原稿を完成させることであったが、2017年後半の米国滞在中に新たな章を書き加えたことにより、全体の構成のバランスが悪くなり、さらに新たな章を書き加えるという方向で当初の構想を調整することになった。そのために研究期間を1年延長したが、その後、以下のような事情で、さらに時間がかかる予定である。2019年はハーレム・ルネサンス100周年にあたり、全米各地でさまざまな企画や展示が行われていたが、かねてから研究課題として浮かび上がっていたオーガスタ・サヴェッジの初の回顧展が開催されていることがわかり、7月上旬にニューヨーク歴史協会でのサヴェッジ展を視察し資料収集することができた。サヴェッジの多くの作品を実際に見ることができただけでなく、弟子であり、これまで論文を書いてきたジェイコブ・ローレンスやロメール・ベアデンとの関係を示す日記、写真、新聞記事、往復書簡などの貴重な資料も入手することができたため、その成果を書籍に反映させる。2020年2月にはかねてから懸案であった、ワシントンDCにある国立アフリカ系アメリカ人歴史博物館を訪問し、歴史的トラウマ表象がどのように展示されているのかの調査を行うことができたが、そこで得た知見を反映させる予定である。3月上旬にはプリンストン大学ファイアーストーン図書館におけるToni Morrison Papersを調査することができた。まだデジタル化されていない膨大な資料もあり、研究課題に関連したものを中心に資料収集したが、さらなる調査の必要性が明らかになった。コロナ禍により調査を途中で断念せざるを得なかったが、可能になり次第、続行することを希望している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮本敬子	4. 巻 56-1
2. 論文標題 黒人女性表象のゆくえーbell hooksとKara Walkerの視覚芸術ー	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 西南学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宮本敬子
2. 発表標題 ハーレム・ルネサンスにおける黒人表象の変遷ー視覚芸術を中心に」（シンポジウム「ハーレム・ルネサンスとは何か」）
3. 学会等名 日本アメリカ文学会中部支部（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮本敬子
2. 発表標題 ジャズ、文学、視覚芸術
3. 学会等名 西南学院大学エクステンション講座「ジャズという奇跡2」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮本敬子
2. 発表標題 Jazz と視覚芸術 ノーマン・ルイスとピバップの美学
3. 学会等名 西南学院大学エクステンション講座『ジャズという奇跡』
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮本敬子
2. 発表標題 Grace King 文学における人種・ジェンダー表象 (シンポジウム「アメリカ南部と白人性」)
3. 学会等名 日本アメリカ文学会九州支部
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 宮本敬子
2. 発表標題 『黒人女性表象は変わったか -Kara WalkerとMickalene Thomasの場合』
3. 学会等名 日本アメリカ学会
4. 発表年 2014年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 宮本敬子 (杉野健太郎編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 22
3. 書名 アメリカ文学と映画	

1. 著者名 宮本敬子 (風呂本惇子、松本昇、鶴殿えりか、森あおい編著)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 22
3. 書名 『新たなるトニ・モリスンーその小説世界を拓く』	

1. 著者名 ベル・フックス著（宮本敬子、大塚由美子訳）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 275
3. 書名 オール・アバウト・ラバー愛についての13の試論	

1. 著者名 宮本敬子(松本昇、馬場聡、中垣恒太郎編著)	4. 発行年 2015年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 17
3. 書名 アメリカンロードの物語学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----